

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370813

研究課題名(和文) 慶長・元和期における豊臣「公儀」の変質過程の研究 秀頼発給文書の分析

研究課題名(英文) A study on the process of the transformation from Toyotomi Kogi to Tokugawa Kogi, An analysis on Documents issued by Toyotomi Hideyori.

研究代表者

福田 千鶴 (Fukuda, Chizuru)

九州大学・基幹教育院・教授

研究者番号：10260001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、慶長・元和期の政治過程において豊臣「公儀」がいかに徳川「公儀」へと変質していくのか、という問題を明らかにするための基礎作業として、当該期における豊臣秀頼の位置を確定するために、その発給文書を悉皆的に収集し、分析することを目的とした。その結果、従来知られていた112点の文書に対し、新たに69点の秀頼発給文書を収集し、総計181点の文書を確認した。それらをDB化し、翻刻文を科研報告書として掲載した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to collect All documents issued by Toyotomi Hideyori. In order to clarify the transformation process from the Toyotomi public government to the Tokugawa shogunate government, we have to make clear the political position of Toyotomi Hideyori in the period. 112 Documents of Hideyori have been known. And 69 new Documents were found by this research. I collected a total of 181 Documents. These were published in the scientific research report.

研究分野：日本近世史

キーワード：豊臣秀頼 黒印内書 慶長・元和期 豊臣公儀 徳川公儀 政治史

## 1. 研究開始当初の背景

近世前期の政治史研究は、関ヶ原合戦をめぐる政治過程については分厚い研究史をもち、また3代将軍徳川家光が親政を開始する寛永9年(1632)からの政治史については、史料の伝存状況が良好なこともあり、体系的な研究の蓄積がなされている。しかし、両者の間に位置する慶長・元和期(1596~1623)は、近世前期の重要なエポックであるにも関わらず、高木昭作氏の政治史研究をみる程度である。その理由は、日記や書状などの同時代史料の伝存が限られていることもあるが、何よりも豊臣秀吉の後継者である豊臣秀頼の政治的位置が、何の実証的分析もなされないまま放置されていることにあると考えられる。そこで、本研究では豊臣秀頼に焦点をあてて、同時代史料を悉皆的に収集することにした。

なお、2014年から2015年は大坂冬・夏の陣後400年であり、それらに合わせて博物館展示や文化講演会等の企画が組まれることが予想された。そうした社会的要請に鑑み、学術研究として新たな知を発信していくことが強く求められていると判断し、本研究に着手することにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本近世史上の重要なエポックである慶長・元和期の諸事象の実証的研究をすすめることにある。その際、従来の「徳川將軍権力の創出」という視点で描かれてきた徳川氏を中心とする政治史に対して、徳川政権の前提を担う豊臣政権が担っていた「公儀」がどのように徳川政権に吸収され、変質しつつも、先行する豊臣「公儀」権力が徳川政権の枠組みを規定したのかという視点を保つことが重要である。したがって、本研究では豊臣秀頼を中心とした勢力の動向を実証的に描くことを不可欠の研究課題として設定した。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究に先行する研究成果には、三鬼清一郎編『豊臣秀吉文書目録』『同補遺』があり、そのなかで豊臣秀頼発給文書は112点の存在が確認されていた。そこで、まず三鬼目録に掲載された史料情報に基づいて、豊臣秀頼発給文書の原文書を調査し、デジタルカメラによる撮影、あるいは所蔵機関による写真データの提供等をうけ、秀頼発給文書の古文書学的分析を進め、また文書相互の比較検討できるような研究基盤を整えた。

また、研究者がこれまで収集した大名家文書の目録情報をもとに、豊臣秀頼発給文書を見出しに努めた。

(2) 集めた史料は、宛所の高さ、殿のくず

し方、書止文言、贈答の内容、喜び文言、料紙の寸法などの史料情報をデータベース化して、古文書学的に比較・検討した。

(3) 集めた史料は、全文書の翻刻文について原文書を復元する形で作成した。とくに、宛所の高さを厳密に検討した。

(4) 文書の保管方法、伝存状況などについて、史料学的分析をおこなった。

## 4. 研究成果

3年間の調査先は、石川武美記念図書館・成簀堂文庫、大阪城天守閣、岡山大学付属図書館、吉川報効会・吉川史料館、金沢市立玉川図書館近世史料館、八王子市久留島家、京都大学総合博物館、国文学研究資料館、国立公文書館、五島美術館・大東急記念文庫、仙台市博物館、天理大学付属天理図書館、東京大学史料編纂所、東北大学付属図書館、名古屋市秀吉清正記念館、鍋島報効会・徴古館、防府毛利報公会・毛利博物館、松浦史料博物館、もりおか歴史文化館、土佐山内記念財団・土佐山内宝物資料館、米沢市上杉博物館等である。また、大学図書館の相互利用、書籍・インターネットによる情報公開により、関西大学図書館、神戸大学付属図書館、九州国立博物館、慶応義塾大学三田メディアセンター、栃木県立文書館、長野市真田宝物館、宮崎県総合博物館等から情報や史料提供を受けることができた。その結果、新出文書71点を確認することができ、豊臣秀頼発給文書は総計181点を集めることができた。

これらの編年別(報告書掲載表2)、受給者別(報告書掲載表3)のデータベースを作った。

また、秀頼発給黒印内書については、全容を確認するための一覧を作成した(報告書掲載表1)。その概要を示すと、年頭6、三季102(端午32、重陽28、歳暮42)、八朔3、鷹・魚(鮎・鮭)献上9、音信12、不明5の計137通であり、そのうち121通が原文書である。この点数は必ずしも多いものとはいえないが、大坂の陣、またその後の豊臣家の滅亡により、豊臣秀頼発給文書が処分されたという経緯に鑑みれば、逆にこれだけの点数が残っていたことは驚くべきことといえる。必ずしも政治的な問題から恣意的に廃棄されたものばかりではなく、江戸期の文書管理において受給者側が文書を選別・廃棄した結果も含まれるだろうが、秀頼発給文書はこの181通に限られるものではなかったことに留意すべきである。

なお、確認できた原文書はすべて翻刻文を作成し、次の4項目に分類した。各文書には解説を加えて、報告書に掲載した。

- A. 黒印内書
- B. 消息
- C. 領知宛行状

#### D. 禁制

以上の作業に基づいて分析すると、豊臣秀頼の内書はすべて黒印・折紙（大高檀紙）で発給されたことを確定できた。

既存の目録や史料翻刻等において朱印とされているものについては、原文書を確認した結果、黒印の誤りであることを確認した。この点には注意をうながしておきたい。

また、消息は秀頼の名前と署名するのみだが、1点だけ大坂夏の陣直前に尾張徳川義直に宛てた消息に書判による署名がある。現在のところ、秀頼の書判はこの1通のみしか確認できていない。よって、秀頼の書札礼は、黒印状という薄礼の書札礼を基本的に用いていたとまとめることができる。

これは、徳川家康・同秀忠の内書と比較検討するならば、家康が豊臣秀吉が構築した朱印状による天下人の書札礼を薄礼化した黒印状を新たな天下人の書札礼として用いたことに対抗したものであり、家康に遅れて黒印を用い始める秀頼は、家康同様に黒印によって自身の書札礼の体系を作ろうとしていたことを指摘した。

また、秀頼の黒印内書の分布状況（報告書掲載表1）から、秀頼は国持大名のほとんどと贈答儀礼をおこなっていたこと、あるいは徳川譜代の榊原康勝や上杉家の老臣直江兼続にあてたものも存在すること、慶長16年の二条城会見後も贈答儀礼は続けられていること、などが明らかとなり、慶長期の秀頼は大坂城で孤立していたわけではないという政治的位置を確定した。

これを前提に、慶長期には秀頼はいまだ「秀頼様」と諸大名から崇められる存在であったにもかかわらず、大坂の陣において諸大名が秀頼の援軍要請に応じなかった問題について、論文および著書を公刊した。

なお、領知宛行状に関しては、慶長17年9月28日付で発給された7通の文書が確認できる。いずれも千石以下の秀頼直臣に対して、黒印で発給されたものである。その範囲は、摂津・河内・和泉の三カ国のみならず、近江・山城・備中に及んでおり、秀頼の支配領域が摂河泉に限定されていなかったことがわかる。

禁制に関しては、大坂冬の陣に関するものが6通、大坂夏の陣に関するものが5通の計11通が確認できた。いずれも堅紙・黒印状であるが、条文は少しずつ異なり、印の位置も日下だったり、袖判だったりと異なっている。

本研究により豊臣秀頼発給文書が網羅的に把握できるようになったことで、慶長・元和期の秀頼がいわゆる「一大名」と呼ばれるような存在ではないことを実証的に示すことができた。この成果により、慶長・元和期の政治史研究が豊臣秀頼の政治的位置を正しく位置づけたうえで実証的に見直され、進展することを期待するものである。

今後の課題としては、3年間の調査期間だ

けでも新たな豊臣秀頼発給文書の発見があり、今後も新出文書が発見される可能性は十分にある。今回の未調査先、また新出史料の追跡調査を進め、豊臣秀頼発給文書データベースの完成度を高めていく必要がある。

消息に関しては、新出史料を得たが、文書の真偽を含めて検討せねばならない問題も多かった。それゆえ、入手した文書をすべて翻刻することを控えたところがある。これについては、今後、論文として発表していく予定である。

なお、平成25年～27年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『慶長・元和期の豊臣「公儀」変質過程の研究 豊臣秀頼発給文書の分析』（課題番号JSPS25370813、研究代表者：福田千鶴）176頁を作成し、各調査先、関連研究機関、当テーマに関わる研究者に配布し、研究成果の共有化をはかった。

また、一般に向けては、著書の刊行、テレビ企画への情報提供、公開学術講演会などを通じて、本研究で得られた研究成果を発信していった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 福田千鶴「豊臣秀頼発給文書の研究」(1)、『九州産業大学国際文化学部紀要』55、16(13-28)、査読無、2013年9月
2. 福田千鶴「豊臣秀頼発給文書の研究」(2)、『九州産業大学国際文化学部紀要』56、24(15-38)、査読無、2013年12月
3. 福田千鶴「江戸幕府の成立と公儀」(『岩波講座日本歴史』10近世1)、31(207-237) 査読有、2014年1月
4. 福田千鶴「大坂冬の陣開戦までの西国大名の動向 黒田長政・島津家久を中心に」、『九州文化史研究所紀要』59、査読無、30(1-30)、2016年3月

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

1. 福田千鶴『豊臣秀頼』（吉川弘文館、2014年）、単著、214頁
2. 福田千鶴『後藤又兵衛』（中央公論新社、2016年）、単著、230頁
3. 福田千鶴『慶長・元和期の豊臣「公儀」変質過程の研究 豊臣秀頼発給文書の分析』（課題番号JSPS 科研費 25370813）平成25～27年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書（2016年）、単著、176頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

( )

研究者番号：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

テレビへの情報提供

・NHK 総合歴史秘話ヒストリア「戦国のプリンス、いざ天下取りへ～大坂の陣400年、豊臣秀頼の素顔～」(2015年5月20日放映、2016年2月17日には「名作選」枠で再放映された)

公開講演

・九州市民大学平成27年度特別講座  
福田千鶴「大阪の陣から400年～大坂の陣の真実」(2015年5月12日、九州国立博物館ミュージアムホール)  
・平成27年度柏原市市民歴史大学  
福田千鶴「大坂の陣と後藤又兵衛」(2015年7月11日、柏原市歴史資料館)  
・平成27年度歴史講演会(徳島県立文書館主催)  
福田千鶴「大坂の陣再考 蜂須賀氏と豊臣氏」  
(2015年11月8日、徳島県立文書館)  
・「ふるさとの歴史と文化」遊学講座(一般財団法人西日本文化協会主催)  
福田千鶴「戦国時代の終焉～大坂の陣～」  
(2016年1月19日、福岡美術館あじびホール)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福田 千鶴 (FUKUDA, Chizuru)  
九州大学・基幹教育院・教授  
研究者番号：10260001

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者